

信仰の試練

(オンライン版は Ichthys.com に掲載)

ロバート・D・ルギンビル(博士)

第一ペテロ 1 章 6-7 節(私訳)

この最終的な救いを見越して、あなたがたの喜びはあふれています。今はしばらくの間、さまざまな試練のゆえに苦しむことがあるかもしれませんが、それはあなたがたの信仰が本物であることを証明するためです。あなたがたの信仰が真実であると証明されることは、火で精錬されても結局は滅びてしまう金よりも、はるかに尊いものです。そして、あなたがたの信仰がこの人生というつぼの中で本物であると示されたなら、それはイエス・キリストの栄光に満ちた再臨のときに、あなたがたに賛美と栄光と誉れをもたらすのです。

序論： 前回の学びでは、悪魔の支配する世に満ちている圧力や誘惑の中で、私たちの信仰を持ち続ける必要性について取り上げました。サタンの世の体系の中心的な目的が、人類を不信仰の状態にとどめること(また、信者の場合はそこへ引き戻すこと)にあることを考えれば、これは決して容易な務めではありません。そのため前回の学びでは、キリストに対する信仰の手綱を放してしまう危険を強調しました。なぜなら、5 節で述べられていたように、死からの「最終的な救い」、すなわち永遠の命は、私たちの信仰が持続することに完全に依存しているからです。6 節と 7 節において、ペテロは信仰に関する議論の焦点を転換し、イエス・キリストへの信仰を堅持するための積極的な励ましと動機づけを与えてくれます。世が私たちの信仰に加える圧力は、実は必要なものなのです。なぜなら、試練がなければ、私たちの信仰が精錬され、強められ、真実であると証明されることはないからです。ペテロが語るように、神が私たちの信仰を天の法廷の前で証し、また、私たちが悪魔の世において圧力や試みや誘惑に直面しながらも忠実にとどまったことに対して、公正に報いてくださることは、まさに神の御計画の中にあるのです。

燃え盛る炉： ネブカデネザル王が、ダニエルの三人の友人(シャデラク、メシャク、アベデネゴ)に対し、王が立てた金の像を拝まなかった罪で「燃え盛る炉」に投げ込むよう命じた時、集まった群衆の誰も、この三人の信仰者が生き残るとは予想していませんでした([ダニエル 3 章 1-30 節](#))。しかし神は彼らを救い出されました。しかも奇跡的な方法で、驚くべき熱さの中にあって「火の匂いさえ彼らにつかなかった」のです。悪魔

の世界という精錬炉における私たちの信仰の試練は、ダニエルの三人の友が受けた火の試練に似ています。なぜなら同様に、神は時に私たちを、世の目には信仰が「焼き尽くされる」べき試練に遭わせられることがあるからです。しかしながら、私たちがこのような厳しい試練を耐え抜くことに成功したとき、それは世界に対する証しとなります。すなわち、私たちの信仰の真実さと、神と御子を信じる者たちを救い出す神の奇跡的な力との両方を示す証しとなるのです。

信仰の精錬炉：ペテロが「火のような試練」と呼ぶ人生の苦難(第一ペテロ 4 章 12 節)は、私たちの信仰をも精錬します。金が火で試され不純物から分けられ、鋼が高炉で鍛えられて強められるように、私たちの信仰もまた、圧力の下で忍耐することによってしか清められず、危機のときに神に頼ることを学ぶことでしか強くなりません。神は、私たち自身の益のために、またこの悪魔の世にいる兄弟姉妹の益のために、試練が臨むことをお許しになります。私たちが投げかけられた困難に信仰によって打ち勝つとき、その経験は神への信頼を築き上げます。神が私たちを救い出すのに十分な方であることを、理屈ではなく実地で学ぶからです。試練は、この世にいる間に神が私たちに対し「自分は確かに救い出す」と証明する唯一の方法であり、同時に私たちが神と御子をほんとうに信じていること——状況がいかに暗く見えてもなお神を信頼する意志があること——を神に対して証明する唯一の道でもあります。そうして私たちが勝利するとき、私たちは同胞の信徒に対して、神の善と力、そして信仰の力と価値を証しする者となります。しばしば、私たち自身の信仰以上に、他の人の信仰がその勝利によって力づけられるのです。その過程において、私たちはまた、苦しみのある側面に気づき、同じような試練に直面する他の人々を励ます助けとなることがあります([第二コリント 1 章 3-4 節](#))。

信仰の剪定：試練は、言い換えれば訓練です。すなわち、私たちの「義に導く訓練」([第二テモテ 3 章 16 節](#))の実地演習です。すでに見たように([ヨハネ 15 章 2 節](#)参照)、神は私たちの信仰という植物を、試練を通して丁寧に剪定し、ご自身のためにより多くの実を結ばせようとされます。剪定の過程は、しばしば当座は痛みを伴いますが、その目的は善い結果をもたらすことにあります。試練は祝福を生みます。なぜなら、試練を通してのみ信仰は強められ、そのことによって霊的成長が促進され、その成長に伴う祝福が積み重なっていくからです。

ヨハネ 15 章におけるギリシア語の語彙は、試練を通して「信仰という植物」が剪定される過程について、いくらかの光を投げかけています。2 節で通常「剪定する」と訳される語は、実際にはギリシヤ語の *kathairō* (カタイロー) であり、ここから「カタルシス (浄化、心の浄化)」という語も派生しています。この語は本来「清める」と訳されるのが普通です。翻訳者たちは「神が枝を清める」と言うことを避けて、ここではある程度の意

訳を行い「剪定する」としています。しかし 3 節でキリストが「あなたがたはすでに清い」と語るときに用いられている「清い」という形容詞 *katharos* (カタロス) も、同じく *kathairō* から派生しているため、ヨハネの語彙の選択が偶然ではなかったことがわかります。

ヨハネ 15 章の比喻の意味はこうです。信者である私たちは、すでに罪から清められています。なぜなら、キリストが私たちの罪のために死んでくださり、私たちがキリストとその御業を信じることに基づいて、神が私たちを赦してくださったからです。つまり、私たちは完全に「立場において (positional)」清められています。しかし、救われた瞬間から「経験的に (experientially)」完全になるわけではありません。言い換えれば、私たちの立場上の聖化は、直ちに完全な経験的聖化をもたらすわけではないのです (#13 参照)。クリスチャンとなった後も、私たちはなおクリスチャンらしく生きる方法を学ぶ必要があります。したがって、信仰の試練、すなわち生活様式の浄化や「剪定」は、霊的成熟へと前進する上で不可欠な要素なのです。試練を通して、私たちは少しずつ神をより深く信頼し、自分自身の力に頼ることをより少なくすることを学びながら、多くの欠点や不完全さを取り除かれていくのです。

ですから、救いの瞬間からこの世に生きる私たちの人生は、大部分が神による「剪定」と「清め」の継続で成り立っています。実際、このプロセスが地上で完全に終わることは決してありません。史上最大の信仰者の一人である使徒パウロでさえ、他の誰も耐えられないほど繰り返し試練にさらされました。しかし彼は、神が自分を完全に整えてくださるこの過程を喜ぶことを学びました。パウロはこう結論づけています。厳しい試練のただ中であつてこそ、他のどんな時よりも神の力に集中し、それに依り頼まざるを得なかったのだ、と。世が決して理解できない方法で、彼を強くしたのはむしろ自分の弱さだったのです。なぜなら、その弱さが彼を自分自身ではなく神に依存させたからです ([第二コリント 12 章 9-10 節](#))。

ですから、キリスト者の人生とは、多くの部分において、私たちの信仰を試し、強め、精錬し、証明する無数の試練をくぐり抜ける歩みです。この意味で、罪と信仰は正反対にあります。信仰は、世が何と言おうとも神を信頼し、神の方法で行動しますが、罪は神を疑い、事実上「この必要は自分で何とかしなければならない」と言うのです。このように、信仰を試す本質的な仕組みとは、神が私たちの欠点に働きかけ続けられることです。すなわち、私たちが神とその御子に信頼して危機を乗り越えることで、自らの信仰の弱さを認識し、それを克服せざるを得ない状況に置くことにあるのです。私たちがこれをどれだけ進んで行うか(すなわち、御言葉から霊的な糧を得、それを平安な時に学んだ上で、試練の時に進んで適用するか)に応じて、神の意図される成長の道を歩み続けることができるのです。

試練には限界がある：私たちの多くは、パウロやヨブのように極限的な試練にさらされる運命にはありません。しかし、それほどまでに困難な試練に直面した信仰の模範である二人でさえ、パウロは「しかし、それらすべてから、主は私を救い出してくださいました」([第二テモテ 3 章 10-11 節](#))と自信をもって言い、ヨブも自分の財産のすべてが完全に回復するのを生きて見ることができました([ヨブ記 42 章 7-17 節](#))。神の約束を信じ、私たちの救いを、時間的にも永遠的にも信頼することを告白する私たちは、この世の試練は永遠ではなく、永遠の栄光への旅の途上にある一時的な障害に過ぎないことを心に留めるべきです。試練はやがて終わります。しかし、神との命は終わることがありません。ですから、私たちが今この世にあって、パウロが言うように「人と天使に見せ物とされている」間、私たちは自分の苦しみを正しく位置づけるための、いくつかの原則を考慮する必要があります：

1. 試練は耐えられるものである：試練に限界があるという原則の一つで、常に心に留めておくべきことは、使徒パウロが私たちに思い起こさせるこの真理です。

あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。(第一コリント 10 章 13 節)

パウロは、私たちが直面するあらゆる試練に対して、その解決が具体的にどのような形で与えられるかを、すべて見通す全知を持っていたわけではありません。ある場合には、紅海が分かれた出来事のように、神は明確で奇跡的な解決を与えられます。しかし別の場合には、その御救いはもっと控えめで、目に見えて劇的ではない形で現れることもあります。また、神はしばしば、私たちがいる試練から「取り除かれる」ことなく、その試練を「通り抜ける」ことによって救われるようにされます。つまり、私たちが最後までその嵐を耐え抜く信仰と忍耐を表すことこそが目的であって、奇跡的にただ中から引き上げられることばかりが神の方法ではないのです。しかし、上の御言葉が明確に保証していることは、私たちがこの世で経験するすべての試練において、神は必ず助けを与えてくださるということです。私たちに求められているのは、信仰と忍耐をもって、神が私たちの霊的成長を極めるために完全に整えられた「剪定の経験」を受け入れることです。もし本当にこの心構えでキリスト者としての試練に臨むなら、私たちは自分自身の成長と、そこから生じる神からの祝福を最大限に得ることができるでしょう。そしてその益は、私たち自身のためだけでなく、周囲の人々の益にもなるのです。

2. 試練は永遠には続きません：試練の限界について覚えておくべき第二の原則は、ある特定の試練がまるで終わりなく続いているように見えるときでも、私たちは神の視

点からの忍耐を持つ必要がある、ということです。世の人々は、「宇宙は昔から何も変わらないではないか」と嘲りますが、使徒ペテロはすぐに、「主にあつては一日は千年のようであり、千年は一日のようである」と指摘し、神は不信者たちが非難するように「約束の実現に遅い」のではない、と教えています。神は、御自身のふさわしい時、定められた時に、必ず私たちを救い出してくださいます。ちょうど、信仰を持たない人々が最も予想しない時に、神の裁きの日が「夜の盗人のように」訪れるのと同じです([第二ペテロ 3 章 8-10 節](#))。歴史の中で、多くの信者たちが「神からの答えを待つ」という試練に直面してきました([ヨブ 35 章 14 節](#); [ダニエル 10 章 1-13 節](#))。エリヤは三年以上の間、アハブ王とイゼベルの迫害から神の救いを待たされました。最初はカラスが運んでくる食物とケリテ川にわずかに残る水に頼り、その後はザレパテのやもめの家における神の奇跡的な備えによって生かされました([列王記上 17 章](#))。しかし、試練がどれほど長く続こうとも、神は常にエリヤを守り、養い、最終的にはバアルの預言者たちに対する大いなる勝利を彼を通して成し遂げられました([列王記上 18 章](#))。「神を待ち望む」という意味を持つヘブル語のヤーハル yachal(通常「望む」と訳される)は、ある学者によれば「身をよじる、もがく」という語根から派生しているとも言われます。極度の重圧の中で神を待つことは、まさに身をよじるような感覚を私たちに与えるかもしれません。しかし、まさにこのような種類の試練こそが、私たちの信仰を育み、霊的成長を加速させるために必要なのです。

3. 気を失うこと(霊的失神)は危険: 肉体的な失神によって一時的に意識を失うように、霊的失神とは、信仰者としての徳の視点を一時的に失ってしまうこと——つまり、神への信仰、永遠の報いに対する確かな希望、そして神と神の子たちへの献身的な愛を一瞬見失ってしまうことを意味します。霊的失神は危険な(もともと前例のないわけではない)試練への反応であり、エリヤの逃亡、ペテロのキリスト否認、そしてヨブが最終的に神に対して忍耐を失った事例などがすぐに思い起こされます。これら三人はいずれも卓越した信仰者であり、彼らはいずれもその失敗からほとんど即座に立ち直りました。しかし、注目すべきは、それぞれの並外れた状況下で、彼らが一時的に信仰の危機、すなわち霊的失神を経験したということです。このような偉大な信仰者たちでさえそうであったならば、私たち自身もこの種の失敗に陥る可能性があることを受け入れる必要があります。特に、苦しみや試練がキリスト者の生涯の通常の一部である以上、私たちも例外ではありません。使徒ヨハネがほのめかすように、私たちは皆「患難」にあずかる者であり(信仰者全員に降りかかるもの)、またすべての信仰者が待ち望む「御国」にあずかり、そして信仰を保つためにすべての信仰者が示さなければならない「イエスにある忍耐」にあずかる者なのです([黙示録 1 章 9 節](#))。自分の信仰が強い圧力にさらされ、それを不当だとか耐えられないと感じるとき、私たちは、これは自分が初めて背負う重荷ではなく(それがどのようなものであれ)、また最後の者でもないというこ

とを忘れてはなりません([第一ペテロ 5 章 8-9 節](#))。将来、大患難に耐えることが運命づけられている信者たちは、間違いなく私たちの誰も経験したことのないほどの圧力と試練に直面することになるでしょう([黙示録 8 章](#)参照)。

4. キリストが私たちに示された模範：自分だけが不当に過酷な苦しみ選ばれているのではないかと思ってしまうとき、常に私たちの主の模範を心に留めておくべきです。「あなたがたは、弱り果てて意気そそうしないために、罪人らのこのような反抗を耐え忍んだかたのことを、思いみるべきである」([ヘブル 12 章 3 節](#))。私たちの主の生涯は、人がこれまでに生きた中で最も困難なものでした。それは、私たちを救うためにご自身の選びによってへりくだり、その道を歩まれたという事実を思うと、なおさら畏敬の念を抱かざるを得ません([ピリピ 2 章 6-8 節](#))。主はご自分の愛する人々に仕えることに人生を完全にささげられましたが、彼らから返ってきたのは敵意、不信、不敬、裏切り、迫害であり、最終的には普通の犯罪者のように恐ろしい処刑を受けられました。それでも主は私たちに、「自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。」([マタイ 16 章 24 節](#))と命じられました。キリスト者にとってこれは、人生を自己満足のために費やすのではなく、神から与えられた使命を果たすことであり、その使命を無事に全うするには、苦難、心痛、そして苦しみが必然的に伴うということを意味します。私たちは確かな証言を持っています。すなわち、「キリスト・イエスにあって信心深く生きようとする者はみな迫害を受ける」([第二テモテ 3 章 12 節](#))のです。しかし、悪魔の敵対に直面しても忍耐し続けず、「キリストの苦しみにあずかる」ことなくしては、この世での短い滞在期間中に神が私たちに定められた任務を成し遂げることはできません([第二コリント 1 章 3-7 節](#); [ピリピ 3 章 7-11 節](#); [第一ペテロ 4 章 13 節](#))。

5. 支えてくださるのは神：すべての試練と苦難のただ中にあっても、神は私たちと共におられます([詩篇 3 篇 3 節](#))。神は私たちをご自身の子どもとするために御子を遣わして私たちのために死なせ、また御霊を私たちの内に住まわせて慰めを与えてくださいました。御父は私たちに必要なものをすべてご存じです。野の花や空の鳥に衣と食べ物とを備えられる方は、私たちのためにも必ずそうしてくださいます([マタイ 6 章 25-34 節](#))。神は私たちの物質的な必要も、その他すべての必要もご存じであり、それらを時の初めから備えておられました。さらに神は、私たちが必要を覚えるとき、祈りに応えてくださるために待っていてくださいます。御父は、私たちが必要とする良いものを何ひとつ惜しむことはなさいません([マタイ 7 章 7-12 節](#))。聖書には、この点で神の真実を目の当たりにした信仰者たちの証しが満ちています。ダビデは、自らの生涯で多くの出来事を経験した上で「わたしは、…正しい人が捨てられ、あるいはその子孫が食物を請いあるくのを見たことがない」と告白しました([詩篇 37 篇 25 節](#))。私たちが忠実にとどまり、主に従い続けるならば、使徒パウロの言葉を確信をもって自らのものとするこ

とができます。「神は、ご自身の栄光の富の中から、あなたがたのいっさいの必要を、キリスト・イエスにあって満たして下さるであろう」([ピリピ 4 章 19 節](#))。

より大きな視野： 私たちは、試練が個人的で個々の問題であり、信仰を強め、真実であることを証明するために与えられていることを見てきました。しかし、信仰の試練のプロセスはそれだけではありません。試練(と、それを勝ち抜く私たちの歩み)はまた、一つの証しの働きでもあり、それを見守る人々にとって、神によってその信仰が尊ばれ支えられるときの信仰の価値と力を示し、励ましを与えるしるしでもあるのです。逆境のさなかには、誰にも見られていない・理解されていないように感じられることがしばしばあります。しかし、私たちは忘れてはなりません。自分が苦難の中で高潔にふるまう姿に、どれほどの人の心が触れられているのかを知っているのは神だけだということを。だからこそ、物事が崩れ落ちるように思えるときにも、この特別な証しの務めを常に覚え、見失わないようにすべきです。私たちの究極の希望は、キリストに対する信仰を通しての復活と栄光に満ちた未来にあるという事実を見据えるべきです。その未来はあまりに素晴らしく、今の混乱と比べるに値しないのです([ローマ 8 章 18 節](#))。

天使たちは私たちを見守っている： 人類が造られる以前、どれほど長い時の間、宇宙は人間の存在なしに存在していたことでしょう。サタンの裏切りと、それに続いて地に下された壊滅的な裁きは、天使たちが神のただ一つの道徳的に責任ある被造物として特別な立場にあった時代に終止符を打ちました。人間は、すべての天使たちに対して神の力と憐れみを示すために創造されたのです。したがって、私たちの創造は、天使たちの神への不従順に対する応答でした。そして、この天の被造物との関係の意味を簡単に見渡すことで、私たちが地上で直面している戦いをより広い視点から理解する助けとなります。というのも、私たち人間は限られた地上的視点しか持たないため、人生における数々の挑戦や混乱、試練の中で、しばしば霊的な近視眼に陥ってしまうからです。実際には、私たちの存在と霊的成長は、天使の世界にとってきわめて大きな関心事なのです。

天使たちは、主がアダムに最初の息を吹き込まれるよりも前から、変わらない姿で存在してきました。そして私たちがこの肉体にある間、天使の被造物に対して広い意味での敬意を払うのが賢明であることは疑う余地がありません([第二ペテロ 2 章 10-11 節](#))。それでも、人類は「御使いたちよりもしばらくの間低くされた者」([詩篇 8 篇 5 節](#))として始まりましたが、復活においては「御使いたちをもさばく」([第一コリント 6 章 3 節](#))者となるのです。主がサタンに投げかけられた「わたしのしもべヨブに心を留めたか」という問いから分かるのは、私たち人間の存在そのものが、悪魔に率いられた天使の反逆に対する、絶えざる証しであり応答として意図されているということです。神は人類を、少なくともその一部として、ご自身の他の被造物に対して一つのことを示そうとして

おられます——すなわち、人間側における弱さの中での信仰と、罪にもかかわらず示される神の憐れみ(イエス・キリストを通しての憐れみ)です。

ですから、私たちは忘れてはなりません。私たちは神に見られているだけでなく、天使たちにも見られているのです。一人の罪人が悔い改めるとき、「神の御使いたちの間に喜びがある」([ルカ 15 章 10 節](#))とあるように、それは多くの義人が忠実さを保ち続けること以上の喜びとなります。女性たちは「御使いたち(が見ている)ために」品位ある態度を取るよう勧められており([第一コリント 11 章 10 節](#); この原則は男性にも当てはまります)、また御使いたちは人類史における神の計画の成就について知りたいと強く望んでいます([第一ペテロ 1 章 12 節](#))。さらにパウロは、コリント人への手紙の中で、自分が「人と御使いたちの見せ物とされた」と訴えています([第一コリント 4 章 9 節](#))。

天使たちは決して無関心な傍観者ではありません。悪魔とその手下たちが常に私たちの信仰を打ち砕き、彼ら自身と同じように不信と不従順に引きずり込もうとしているのと同じように([第一ペテロ 5 章 8 節](#))、選ばれた御使いたちは私たちの仲間であり、神は主として私たちを助けるために「御使いたちを風とし、仕える者たちを燃える炎とされたのです」([ヘブル 1 章 7 節](#), [1 章 14 節](#)参照; [ダニエル 10 章 12-13 節](#))。キリストは幼子たちについて「彼らの天使はいつも天におられるわが父の御顔を仰いでいる」と語られました([マタイ 18 章 10 節](#))。また黙示録では、七つの教会それぞれに御使いが守りに立っていると記されています([黙示録 1 章 20 節](#))。このように「多くの証人に取り囲まれている」([ヘブル 12 章 1 節](#))のであれば、どうして信仰において気を緩めることができるのでしょうか。天の観覧席は天使たちで満員であり、彼らは私たちを応援し、成功に歓喜し、失敗に悲しんでいるのです。このことを思うとき、私たちは勇気を得るべきです。エリシャのしもべは、アラムの軍勢を見て心が溶けるほど恐れましたが、エリシャの祈りによって神が彼の目を開かれたとき、彼は「山がエリシャを囲む火の馬と戦車で満ちている」のをはっきりと見ました([列王記下 6 章 17 節](#))。同じように、私たちも心の目を開き、自分が決して孤独ではないことを悟らなければなりません。神は共におられ、御使いたちは私たちを見守っています。どの試練も、どの苦難も、どの戦いも、天からの観客なしには存在しません。ですから、「忍耐をもって、私たちに定められている競走を走ろうではありませんか」([ヘブル 12 章 1 節](#))、天にいる御使いの兄弟姉妹たちがサイドラインから声援を送ってくれているのですから。

結び: 私たちの望みは永遠の望み: このように私たちは信仰を堅く守り、忍耐をもって試練に耐え続けます。それは「キリストの苦しみにあずかる者」([第一ペテロ 4 章 13 節](#))として与えられた名誉であり、その信仰が「人生というつぼの中で本物であることを証明され」([第一ペテロ 1 章 7 節](#)前半)、やがて「イエス・キリストの現れるとき、賛さんと栄光と誉れをもたらし」([第一ペテロ 1 章 7 節](#)前半)時を待ち望んでいるのです。

私たちの信仰は揺らぐことなく保たれています。なぜなら、最終的な救い、最終的な勝利、最終的な承認と報いを、今の短い人生で耐え忍ぶどのような苦難をもはるかに超えるものとして確信しているからです。イスラエルの子らもまた、エジプトから「乳と蜜の流れる地」へと導き出されましたが、それは厳しい試練と誘惑を伴う道のりでもありました。ですから、私たちも今ここで信仰の目をもって、必ず与えられる救いと報いをはっきりと見据えましょう。まだ現実には起きていなくとも、神の救いを前もって喜びましょう。自分自身の「紅海が分かれたる」ことが起こる前からその勝利を喜び、神が必ず時至って私たちを乾いた地を歩くかのように渡らせてくださることを、揺るぎない確信をもって知りましょう。こうした態度こそが、あの「賛美と栄光と誉れ」を私たちのものとするのです。すなわち、神からの賛美(主からの「よくやった」という声)、神からの栄光(神が私たちの勝利を万人に明らかにされること)、神からの誉れ(永遠に続く具体的な報いの授与)です。これらの祝福は、この世の悲しみや失望とは比べものになりません。永遠は私たちの前に広がっているのです。ですから、神が共に走ってくださり、またゴールに立って私たちの信仰の忍耐を褒め、報いてくださることを十分に知りながら、「忍耐をもって」この短い競走を走り抜こうではありませんか。

(ペテロシリーズ#23「信仰の目を通して見る」に続く)